野木小学校
同窓会報
第15号
平成14年12月
野木小学校同窓会編集部

同窓会報発行のご挨拶

第39回卒（昭和23年）玉置
同窓会長　新田　賢

同窓会員の皆様におかれましては益々ご健勝にてご精励のこととお慶び申し上げます。

平素は本会の事業活動ならびに運営の各面にわたり、格別のご指導、ご支援、ご協力を賜りまして、衷心より有難く厚くお礼申し上げます。お蔭様で母校も先生方の適切なご指導と地域の皆様のお力添えが相俟って、健全な学校経営が営まれ、明日を担う地域の子供たちの元気な声がこだまする共に、本会の事業も極めて順調に進展しており、ご同慶の至りであります。

紅葉前線の南下に伴い「野木の里」の山野も色付き始めました。一面の刈田の中に緑の縞模様が幾つか見えるのは、米の生産調整による大麦の作付けされた田んぼです。戦中、戦後の食料難の時代には、多くの農家が二毛作の一環として丹精を込められたものでした。今、飽食の時代と言われ、米の消費量は一人年間六十キロまで減少し、年々減少傾向にあるといわれています。このため米の生産調整を余儀なくされていますが、米の消費拡大の着実な実行と、いろいろな政策の実現を願い豊かな水田で稲作が出来ない苦しさからの開放の早からんことを祈らずにはいられません。稲が実らない農村の姿は、夢に見る、忘れがたきふるさとの風景にはないはずです。「山青く」「水清し」「豊かな水田」これがふるさとの三点セットといえるのではないでしょうか。衆知と英知を結集してこの風景を永遠に残して行きたいと念じてやみません。

今年もまた限られた水田ではありましたが自然の豊かな恵みを受けました。ただ、台風の来襲はなかったのですが、フェーン現象で高温が続き、ブランド米のコシヒカリの品質がやや低下し残念な結果でありました。野菜類も病害虫、有害鳥獣との戦いに加え、海外からの安い価格の輸入品の影響で、生産コストギリギリの販売価格で苦労された方が多かったと思います。

自然があり、農地があり、農作物が栽培されている環境で、自然に目を向け、体験させることの重要性は申すまでもありません。今年から始まった、学校の週休二日制の下、総合学習の取り組みの中でも、農業体験の学習が取り入れられていることは喜ばしい限りです。三世代交流会などの催しなども行われ、人と人とのふれ合いの中から、人間性豊かな子供が育って行くことは地域の将来にとって望ましいことであります。

第十五号を数える本誌に今年も多くの玉稿を賜り紙面を飾ることが出来ました。厚くお礼を申し上げます。今年も喜び、悲しみいろいろな出来事がありました。本誌がお手元に届くころには、歳末で心せわしくお過ごしの中にも、新しい年への希望を確かなものにすべく思いを馳せておられることでしょう。子供たちの健やかな成長と母校の更なる発展、会員各位の益々のご健勝、ご多幸を心より念じましてご挨拶と致します。

輝きのある野木の子に

学校長　森口良造

日毎に寒くなってまいりましたが、同窓会会員の皆様方には、益々ご健勝にてお励みのこととお慶び申し上げます。日頃より、同窓会事業、並びに、本校の学校教育の推進に物心両面にわたり、格別のご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、本年度、学校教育目標を「自主性創造性に富み、情操豊かで心身ともにすこやかな子どもの育成」から「輝きのある野木の子」に改めました。改めるにあたって、先生方にお願いしたことは、「学校教育目標から、学校が何に重点に取り組み、どのような子どもを育てようとしているか、どのような特色があるのかといった学校の姿が見える、子どもの姿が見えるものにしよう。しかも、誰でも覚えやすい簡潔なものに」ということでした。

ところで、今年度、東大名誉教授の小柴昌俊さんがノーベル物理学賞、島津製作所研究主任の田中耕一さんがノーベル化学賞を受賞されることになり、暗い報道が多い中で、ビッグニュースとして大変快い思いをしました。

今回のお二人に共通するのは、実験中の偶然からの世界的大発見になったとのことです。何か幸運な気もします。

しかし、わたしは、お二人

が失敗しながらも失敗にくじけず、希望を持ち、目を輝かせながら前向きに徹底して継続的に検証する姿勢が、ノーベル賞につながったと思います。

本校の子どもたちにも、「学校では間違えてもよいこと、また、学校は間違えるところ」だと教え、間違えたら素直に認め、それをもとに前向きに挑戦する力を身につけさせ、輝きのある子どもたちを育てていきたいと考えています。

随感

第52回卒（昭和36年）上野木

県議会議員　中川平一

先般、上中町三宅出身の百六歳の松本さんが長寿福井県一になられた。松本さんは松寿苑で日々元気で楽しく生活しておられる。ついこの間まで田畑を耕やし、一人で家を守っておられたそうだが、苑では「何にもせんとごっつおよばれてアンベしてもろて有り難い事や。」と感謝の言葉が毎日の口ぐせである。さすが長生きされる人は違うと周囲が教えられ感心する。

県議になって葬式に行く機会が増えた。多くの人にお世話になっている身、極力時間を作って参列させて頂いている。そしていつも思うのだが、やがて私にもこういう日が来るという現実である。江戸時代の狂歌の大家の辞世の句、「今までは人の事だと思いしが、俺が死ぬとはこいつはたまらん。」というのがあるが、皆いつの日か自分にも死が来る事は解っているが現実の事とは感じられないのである。私もその一人であるのだが……。

しかし出来れば松本さんみたいに百六歳までとは言わぬまでもなるべく元気で長生きしたいし、多くの人にも長生きして欲しい。そこで長生きするにはどうしたらいいか。松本さんを見習えばよいのである。日々、何事にも感謝している。ひょっとしたら感謝の心が人をして幸せで健康な人生を保証するのではないかと思う昨今である。

さて野木地区の多くの皆様のお蔭で県議として働かせていただいてから早三年半になろうとしている。景気問題、道路問題、環境問題、合併問題等々、目の前に課題が山積している。が、我々政治に関わる者はどの問題も小手先で処理するのではなく、百年の大計をもって責任ある主張をしていかなければならないと考えている。

明治、大正、昭和、平成、二十世紀から二十一世紀へと百六歳の松本さんが生き、私たちが生き、そして子どもたちが生き、次々に生のバトンは渡っていくのであるから……。

想い出から

第45回卒（昭和29年）堤

町議会議員　井上幸夫

同窓会の会長さんから、同窓会報寄稿の機会を与えて頂きましたが、何を書いていいか迷っていたところ、ふと同窓会報の創刊号が残してあったことに気が付き、今は亡き中川知事のお祝いのことばや、野木小学校の沿革など、あらためて懐かしく、興味深く読ませて頂くことができました。

堤分教場で教わっていた杉山の児童の本校転入で、転入生もさることながら、本校の自分達も緊張したこと、中学校が併設されており、大きな中学生と一緒に暮らすことの不安もありましたが、それ以上に可愛がってもらったことなどの想い出が、昨日のようによみがえって参りました。

また、私たちが卒業した昭和二十九年には、今の約三倍の二百人程度の児童が在校しており、現在とは隔世の感があること、そして、何よりも多くの先輩の皆さんが、野木小学校の同窓会、ひいては故郷の発展のために多くの期待をされ、後に続く者の責任の大きさを痛感いたしました。

私も十年ほど福井を離れて生活し、故郷の多くの皆さんにお世話になった経験から、今まで以上に故郷の有り難さについて実感し、大切にしなければならないことも常々感じており、お世話になった周りの皆さん方のご恩を忘れてはならないと、自分に強く言い聞かせているつもりです。

私も、いずれは年をとり、再び皆さんのお世話になることと思いますが、それまでは故郷や周りの皆さん方へのご恩返しを人生訓とし、今後の人生を精一杯過ごしたいと考えております。同級生の皆さん方には、変わらぬご厚情を頂きますようよろしくお願いします。

同窓会報を改めて読むことができたお陰で、懐かしい想い出とともに、愛郷心を再び呼び起こして頂いたことに感謝し、考え付くまま筆を取らせて頂きました。

とりとめのない文章になったことをお詫びするとともに、同窓会のますますの発展と、会員の皆様のご健康をお祈り致しまして筆を置きます。

児童事情今昔

第49回卒（昭和33年）下野木
町議会議員　倉谷典彦

私は、昭和二十年生まれ、卒業して四十四年が過ぎました。「光陰矢の如し」を痛感している昨今です。同級生は十九名です。この数字だけを見ると少ない同級生だなとお思いの方が多いと思います。無理もありません。当時の同級生は三十名・四十名が普通だったのですから。しかし現在の野木小学校はどうでしょうか。全員で七十六名、二十名以上のクラスがなく、十名に満たないクラスがあると聞き、大変憂慮すべき事態だと感じております。

今直ちに解決というわけには行きませんが、人口増加対策について地域一体となって考えなければならないと思います。子供はまさに次世代を担う宝であり大切な存在でありますから。

ところで、環境の変化は、今や地球規模になってきた気配を感じます。温暖化現象もその一つだと思います。

私達の子供の頃は、雪は一メートル位は積もり、寒い日は凍った雪の上を近道をしながら学校へ行った記憶があります。近年そういった現象が見られないのが残念です。

私達の地域は、純農村であり、稲刈り・稲木掛等農作業の手伝いが多くありました。稲刈跡の田んぼを走り回り鬼ごっこ等して遊んだ記憶がよみがえります。今は機械化が進み、田に子供の姿を見ることが殆どありません。自然の中に土や昆虫などと親しめる環境ではなくなってしまった農村、寂しい限りです。

学校も週休二日制になり、加えてゆとりの教育の導入により学校教育も様変わりしてきました。私たち同級生も変わり行く環境を理解しながら校庭一杯になる児童の姿をもう一度夢見ながら野木小学校を見守りたいと思います。

会員からの便り

昭和と私

第30回卒（昭和14年）
杉山　竹村長太郎

ありがとう……。過ぎにし人生を振り返るとき、口に出るのは、この言葉です。

もう十四年にも成ろうとする、昭和六十四年一月七日、激動と波瀾に満ちた、昭和天皇が、その生涯を閉じられ、私も元年生まれで年号と同じ、七十七歳で喜寿となり、昭和と共に生きて来たと云っても過言ではないと自負しています。昭和が終わると、平成と元号が変り、時代がすごい勢いで動きました。

顧みる時、野木尋常高等小学校へ通学すると、学校前を流れる小川の石橋を渡り校門を入ると、左右に櫻の木がありました。春には美しい花が咲いたのを覚えています。右手の奉安庫に一礼して昇降口へ進むと、松の木の下に二の宮金次郎の銅像が迎えてくれました。校庭のポプラの大木が「真っ直ぐに大きく成れよ」と天を指し、また柳は「細く長く、柔軟に生きよ」と、何時も見守っていてくれたことを、今心の故郷と偲んでいます。この学舎を卒業された多くの同窓生は、大きく飛躍され又各所で重要な仕事に携わっておられるのです。

私等第三十回卒業生は四十名でありましたが、それから六十有余年の歳月が流れても、忘れられなく懐かしく、今も同級生のことを想いつつペンを持って居ります。

「人」の字は互に立て合う姿を表したものと、教わりました。家庭でも、職場においても、互に相手の心になって、立て合う事が何よりも、一番必要な事ではないでしょうか。初回卒業の方々は百歳をこえられ、今年の卒業は九十四回位と思います。

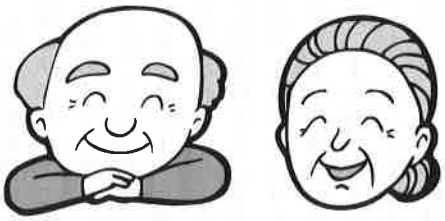
数え切れない多くの同窓生であって、初期の姿からはいろいろと変貌をしています。

現に、周りは老人が増え、少子化に拍車がかかり卒業生も年毎に減少していますが、今後益々と向上発展するよう、精進して行かねばならないと思います。

野木小学校同窓会々報の十五号が発行され、誠におめでとう存じます。会長の新田賢氏、並びに編集された諸氏の御努力に対し、深く感謝と敬意を表する次第であります。

御代の世に　耐え来た痕か
膝が鳴く。喜の字の祝い、
老いの角番

平成十四年　白露に



思い出

第37回卒（昭和21年）
下野木　倉谷千恵子
（旧姓 山本）

昭和二十八年九月二十四日、十三号台風で、北川が下野木の前で切れ田圃一面土砂に埋りました。トロッコ一輪車で土地改良が行われみんな作業に出ました。私はこの春玉置から下野木へ嫁に来ました。幼い頃から両親がなくて、祖父母に育てられ我ままで放題で娘時代を過して来ました。嫁に来てからは、明けても暮れても、仕事、仕事。さつきは、田圃中、苗を手で植えました。秋は、広い田圃を一株一株鎌で刈り田一面に干しておいて午後から脱穀機でこき、籾を袋に入れて持ち帰り乾燥しました。それでも夜になると、ラジオを聞きながら寝られるのがたのしみでした。時代が移り変るとともに、農作業も機械化され、さつきは田植機になり、苗は四すみだけ手で植ればよくなりました。秋もコンバインで刈り、労力は、昔の何十分の一ですみます。汗を流して刈干しした頃が、なつかしく思い出されます。その分今では、旅行、お参り、グランドゴルフと、たのしみも多くなりました。この間も勝山恐竜グランドへ大会に行って来ました。右の方に勝山大佛の屋根が、左に恐竜ドームが見える景色のよい所です。私の打ったボールが芝生を越えて草原まで飛んで行ってしまいました。ボールのまわりの草を手でのけていると、「そんなことしたら違反になるで」と丸岡町の山田コズイさんが教えて下さいました。武生市、清水町、上中町の人達と一緒になってたのしく、プレーが出来るのも、健康でいられるからと感謝しております。今こうして振返ってみると、むじゃきな小学時代、お世話になった、先生方のお蔭です。よくショッピングセンターで佐野節子先生に、お会いしました。最近お見うけしなくなりました。先生お元気でいて下さいますか。いつまでも丈夫で、私達を見まもっていて下さい。野木小学校は心のふるさとです。いくら産業が発達しても、山や川など私たちの自然は、大切なものだと思います。朝起きて、「今日も一日がんばろう」と自分に言い聞かせ、このさわやかな野木の里で、鍬をとる毎日です。

幻の故郷

第50回卒（昭和34年）
千葉県八千代市　伊藤憲昭

印象がよほど強かったのでしょうか。毎年お盆や正月になると、いつも思い出されるのが幼少時代を過ごした『生れ故郷の玉置や随分長く通った様な気がする野木小学校』の事です。それもどういう訳か〝土地改良前の田舎の風景〟と木造の〝野木小学校〟が鮮明に思い出され、しばらくは遠い記憶に残る校舎の中、曲りくねった小川、畑や田圃などを思い出しつつ記憶の中で散策するのが、ここ数年の恒例となっています。実は新しい校舎になった野木小学校には今まで一度しか訪問していません。また二十五年前に玉置・玉泉寺の住職をしていた父親が他界をしてから、玉置にすら二十四年間一度も帰っていません。これと言った理由はありません。どうしてなのか自分にもよく分かりません。敢えて理由を探すとすれば〝昔の思い出が強すぎて、新しくなった現実を見るのが忍びない〟と言う事でしょうか。父親が兼務をしていた名田庄村のお寺にお墓があるので、お盆には何時も上中の駅前を車で通り過ぎているのにどうしても〝その気〟にならないのです。いつも日笠の方角から新しい小学校の建物や玉置のたたずまいを横目で見ながら来年は・・と思いつつ年月が過ぎてしまいました。

中学を卒業してから、憧れていた戦闘機のパイロットになる近道だと進められ、航空自衛隊の少年自衛官の道に進み、その夢破れ二十三歳の時にはアメリカに渡りオクラホマ州の大学に四年間私費留学をし、卒業後はロサンゼルスで十四年間会社を経営する機会に恵まれました。その間結婚、一男二女に恵まれて十四年前に帰国をして現在は千葉県八千代市に居を構えています。今ではお寺とはスッパリと縁が切れてしまい母親は岐阜県羽島市に二十年前から住んでいます。よくよく考えてみると生まれてから十五年間は野木に住み、八年間は自衛隊、十八年間はアメリカ、帰国をして十四年間は千葉県と大きなウネリの中で生活をしていた様に思えます。父親が若くして他界をしたのは私が三十歳の時でした。本当にショックな出来事でした。アメリカのロサンゼルスで会社を設立してから三年目、仕事が軌道に乗り始め長男が生まれたばかりの時でした。なにもかも投打って帰国をして父親の後を継ぐか、そのままアメリカにとどまるかの選択には母親の一言が大きく影響をしました。

もし人生に〝IF／もし〟と言う言葉があれば、今頃は間違いなく、私自身が玉泉寺の住職をしていたのではないか

と想像しています。中学生の頃、どうせ親父の後を継ぐことになるのだから、思い切り人と違う人生を歩んでみようと思ったのが少年自衛隊とアメリカ留学（四年間で帰国の予定）の道でした。二十歳の時にはわざわざ伊藤明雄から伊藤憲昭（のりあき／僧侶になったらケンショウと読むはずでした）に裁判所で長い時間をかけて名前を変えて貰ったのも役にはたたなかった事になります。現実は計算通りにはいかないものです。

今では空想の中だけですが、鮮明に思い出される野木小学校の木造校舎で走り回っている幼い自分の姿、暗くなるまで遊び回った〝お宮さん〟などの風景、先生の思い出、旧友との思い出などは何時までも胸の内に大事に秘めておきたいと思っています。

『故郷』を外から、その様に長い時間眺めている人間がいるのも一興ではないでしょうか？

私の野木小学校時代

第54回卒（昭和38年）
中野木　速水のり子

小学校時代といえば四十何年前の遠い昔の事ですが、ついこの間の様にあの頃の思い出が盛沢山浮かんできます。制服の袖口の鼻汁を拭いた跡、小さい体には重過ぎる布のマント、くたびれた靴、どうにもならない寝癖のついた髪、冷たいカッパズボン、また畑の取れたてのきゅうりや大根の味は思い出すだけで口の中に広がっていくのを覚えます。しかし脱脂粉乳だけは思い出したくない味です。

元旦の登校日、校長先生の話は忘れても赤白饅頭だけは忘れずに持って帰りました。かけ算の九九が正確に言えず友達は次々と帰って行き私だけなんで…と思いながら何故か最後の一人になるのを楽しんでいた記憶もあります。発表会の劇の配役は自分の希望の役が言えなくて自分自身に情け無さを感じた事も思い出します。

「こうちょうせんせいおはようございます。」「やあ、おはよう。」と言って大きな手で小さい頭を撫でてもらうと何故か暖かい気持ちで一日が過ごせた低学年の頃。高学年にはソフトボールで厳しさ、苦しさ、満足感？を味わった様に思います。

卓球大会間近なある日、担任の先生が以前勤務されていた熊川小学校で練習試合をしました。井の中の蛙状態で力不足を目の当たりにしてショックを受けた事も忘れられない思い出の一つです。その小学校の跡地に現在特別養護老人ホーム松寿苑があります。初めて訪れた小学校の地に今こうして勤務させてもらっているのも何かの縁。

夢に現われる小学校時代は教室で机に向かい授業をしていますが教科書を忘れあわてている自分がいます。級友は幼い姿で登場しています。私の姿は？ よく思い出せません。今度夢を見た時は忘れずに鏡をしっかり見たいと思います。可愛らしい小学生の頃の姿が鏡に映ることを願って…。

思い出は旧校舎と少年野球

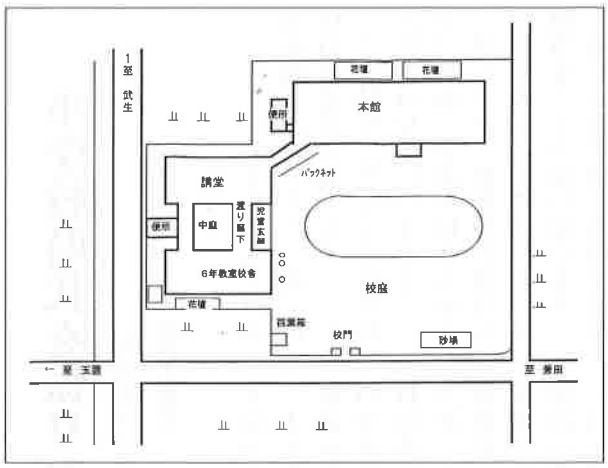
第58回卒（昭和42年）
下野木　田中一法

私は昭和四十二年第五十八回の卒業である。計算すると卒業して三十六年にもなる。私が通っていた頃と比べると、学校もほとんど変わってしまった。校舎・体育館・グラウンド。もちろんプールはなかったし校歌もなかった。いつ頃今の校舎・校歌ができたのかこの機会に調べてみた。

昭和四十二年十一月　校歌制定
昭和四十四年七月　校舎竣工

と同窓会誌にあった。我々の時代は上中町立野木小学校になって〝最初の時代の最後の期間〟だったのではないかと思う。

小学校時代のことを思い出してみると、やっぱり旧校舎のことが最初に頭にうかぶ。旧校舎のことを思い出して配置図を書いてみた。本館と呼んでいいかどうかわからないが、二階が三年～五年教室。一階は教員室・図書室・調理室・理科室があった。渡り廊下を渡ると講堂。もう一つ渡り廊下を渡ると六年教室の建屋で、二階は六年教室と和室、一階は一・二年教室・音楽堂があった。講堂と六年教室の建屋の間には中庭があり、渡り廊下のところが児童玄関であった。



校門・校庭・校舎裏全て本当に懐しく思い出される。

小学校時代のもう一つの思い出は少年野球である。当時、五年・六年になると男子は野球、女子はソフトボールを放課後、先生に教えてもらった。野球は僕らの担任でもあった本田先生、ソフトボールは筧先生で、本田先生は大変きびしかったことを憶えている。当時、上中の五つの小学校対抗の野球大会があり、野木小学校はいつも強かった記憶がある。

十数年前になると思うが、担任していただいた先生に来ていただいて同級会をしたことがあった。確か小学校を卒業して二回目だったと思う。この原稿を書かせていただいたのを機会に三回目の同級会ができたらと思う。

今になって思う事

第66回卒（昭和50年）
中野木　武田秀行

数年前から、野木小学校卒業の同級生数人と、年一、二回のペースで会って食事会（呑み会）をしているのですが、いくつになっても、小学校の同級生っていいなあとしみじみ感じています。

何といっても、気を使わずしゃべれるし、昔の話をしてもみんな理解してくれるし、とても心地の良いやすらぎの場になっています。

今年の正月、若狭高校の同窓会が小浜市内でありましたが、その時は、なんとなく構えていた自分がいたような気がします。

在学当時の思い出と言えば、六年生の時、M先生にほとんど毎日のように、T君と私が殴られたという事が一番に思い出されます。そんなに、悪い事もしていたとは思えないのですが、いつも二人でした。

今、思えばいい思い出ですが、その頃は親にも誰にも言えず、涙を流して我慢していた自分がいたようです。

今だったら、とんでもない話ですよね。

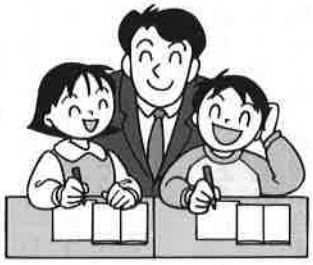
私は、自営で建築業をしているのですが、現在の自分は、ちょっと大げさに言えば、小学校時代に形成されていたのかな？ なんて思ったりもします。

忍耐、根性などと言う文言は古くさいかもしれませんが、私も、人並みに小学生の子どもを持つ親として最近の学校教育に対して一言。

もっとある時はやさしく、またある時はきびしく、勉強や運動いろんな事に優劣をつけてほしいと思います。世の中は弱肉強食の時代なのですから。

話が違う方向に行きましたが、私は、野木地区に生まれてから他の地区で生活した事が一度もありません。

野木地区を愛する純粋な野木地区民として我が母校野木小学校、そして野木小学校同窓会が、より一層発展する事を祈ります。



小学校時代を振り返って

第66回卒（昭和50年）
福井市御幸　山口明美
（旧姓 長谷河）

一年生に入学し、二ヶ月余りが過ぎた頃でしょうか、担任の田辺民江先生に、

「これから新しく建てられた校舎の見学に行きます」

と言われ、木造の旧校舎から二列に並び、緊張した面持ちで新校舎に足を踏み入れた時の事を今でも思い出します。

新しい校舎は、当時ではめずらしい真っ白な鉄筋コンクリート建築で、教室の南側が全面ガラス貼り、音楽室は防音設備が整った本格的な部屋、中には一人ずつ弾くのには充分すぎるほどの数のオルガンがあり、当時六歳の私の眼はもう釘付けでした。また給食の準備もエレベーターを使用できるようになるなど、これからこの近代化した学校で学べることへの期待で胸が高鳴る思いでした。

あれから幾年もの月日が経ちましたが、外観はあの当時のままで、私にはそれが何よりも嬉しいことですし、これからもそうあり続けてほしいと思っています。

また先日、小学校を訪れる機会があり何年かぶりに校舎の中を拝見させて頂きました。机の数は少し減ってはいましたが、あの当時と変わらない教室や、碁盤の目になった床板までもが懐しく感じられ、階段の踊り場に掲げてある絵に目を向けると、いつも見ていたんでしょうあの頃の思い出が甦って来るようでした。当時を振り返ってみますと私達のクラスは、元気がありすぎる？ 先生泣かせのクラスだったように思います。いたずらは日常茶飯時で、なんと言っても四年生の時の担任の産休代替の先生を変えてしまったほどのつわものでした。

卒業して二十七年、私達のクラスは同窓会を一度もしていません。ただ発行される同窓会会報の名簿に目を通すことしかできませんが、元気でお過ごしでしょうか。

私は今、主人の仕事の都合で地元を離れていますが、こ

ちらに来るようになり、古里の良さをしみじみ感じているところです。澄んだ空気においしい水、四季折折の季節感が肌で感じられる、そんな今まで当り前だったことが当り前ではなかったということに初めて気づいている私です。この野木村で生まれ育った事に感謝し、いつまでも豊かな自然につつまれた野木の里でありますよう願っています。

思い出

第86回卒（平成7年）
山梨県都留市　福住剛己

今年の八月、大学の授業のレポート作成のために野木保育所に体験学習に行きました。保育所の子どもたちと野木小学校のプールに遊びに行きましたが、昔と変わらないプールに、毎日といっていい程、泳ぎに行ったときのことをなつかしく思い出しました。とても深いと思っていた大プールも、今では私の胸ほどもなく、少しさびしくも思いました。保育所への帰り道には、グラウンドでの少年野球が目に止まりました。私は、小・中・高・大学と野球を十年近く続けていますが、そのきっかけになったのはこの少年野球です。いつもグラウンドで年上の人が汗まみれになって野球をしているのを見て、きっと楽しいに違いない、自分もしてみようと思い入りました。やってみると、とても楽しく野球の魅力にはまってしまいました。練習はつらかったイメージしかありませんが、仲間と試合をして勝ったときのうれしさは最高でした。今は大学で準硬式野球をしています。チームの雰囲気もよく、小学校のときのように楽しく野球をしています。

私の小学校のときの学年は男子五人で少なかったのですが、その分とても仲がよかったと思います。修学旅行、遠足、スキーとたくさんの思い出がありますが、中でも一番の思い出は音楽会です。岡本先生の指導のもと本番に向けて厳しく何度もやり直しをしました。今までで経験したことのない大勢の人の前でとても緊張していたことを覚えています。しかし、みんなといっしょにうまくあわせてできた時には、難しいことをした達成感があったように思います。最近は、このような緊張感のある経験をあまりしていないなと音楽会のことを思い出しました。

小学校では三人の先生に教えていただきました。楽しい思い出ばかりです。私も、小学校の思い出が語ってもらえるような先生になりたいと大学で勉強しています。今の私にとって、大学での野球部の活動と先生になるための勉強の原動力は小学校のときの思い出です。

私の学生生活

第86回卒（平成7年）
愛知県大府市　森井美由

私が野木小学校を卒業して七年が経ちます。小学校卒業後、中学・高校に進み、現在は愛知県の短大に通い充実した生活を送っています。短大では体育学科を専攻しています。勉強している内容は、体育学科というだけに実技ばかりやっていると思われがちですが、実はそうではありません。確かに体育実技はありますが、講義のほうが多いのです。主な科目に、スポーツ心理学・トレーニング論・運動生理学・食生活栄養論・加齢学など体育や健康に関する幅広い分野の勉強をしています。また、数多くの資格が取得できるようになっていて、私はそのうちのいくつかの資格を取ろうと勉強しています。そして一番大きな目標は、中学校教諭免許状（保健体育）を取得することです。今年の六月には上中中学校で四週間教育実習をさせていただきました。始めはすごく不安で自分が先生と呼ばれることに違和感もありましたが、母校ということもあり、先生方や生徒のみなさんにも恵まれ、とても実のある楽しい教育実習になりました。一緒に体育の授業をしたのはもちろんのこと、給食を食べたり、掃除をしたり、部活ではソフト部の子と練習をし、試合に行ったりしました。私がソフトボールを始めたのは小学校四年生の時で、夏に子供会の行事で大会があり、それに出るために始めたのがきっかけでした。その後、中学と高校でもソフトボールを続けました。練習は厳しく、またつらい思いもたくさんしましたが、今ではとてもいい思い出です。そして短大に入り、ソフトボールとは違った他のスポーツをしてみようと思い、硬式テニス部に入部しました。指導者がいないので、先輩にルールやラケットの握り方など一から教わり、たくさん練習して少しずつ上達しています。これからもっとうまくなれるように、そして楽しくテニスをしていけたらいいと思います。一人暮らしをして一年以上になります。慣れるまでは大変でしたが、今では楽しくやっています。勉強と部活の両立がうまくできるように、また後悔しない学生生活にしたいと思います。今しかできないことを最優先にして。

上中町家庭の日啓発作文コンクール

金賞

お母さんの手になったよ

三年　辻本晃士

五月のはじめ、ぼくはいつものように学校から帰ってきました。

「ただいまー。」

あれっ。

いつもいてくれるお母さんがいません。ふしぎに思いながら家の中に入ると、手紙がおいてありました。

「あきひとへ。

お母さんは手が切れたから、ちばいいんに行ってくるよ。まっとってね。」

ぼくは、またまたびっくりして、すぐにお母さんのけいたいにかけてみました。

お母さんの手紙は、すごくヘタくそな字で少し血がついていました。

「お母さん、だいじょうぶ?」

「うん。だいじょうぶやで。今、千葉先生に四はりほどぬうてもろたわ。」

「えーっ。いたい?」

「いたいでー。なきそうや。」

ぼくは、お母さんがかわいそうと思いました。

「何かしといてやろか。」

「うん。ちょっと昇子ちゃんにかわってくれるか?」

お母さんは自分が作るつもりだったポテトサラダ作り方を昇子ちゃんに言いました。

ぼくたちは二人でポテトサラダ作りをはじめました。まず二人でじゃがいもをむいて、ゆがきました。そして、つぶしました。これが一番おもしろかったです。きゅうりやソーセージをきったり、にんじんやグリンピースをゆがいたりして、全ぶまぜました。さいごに味つけをしました。マヨネーズを入れて、まぜたら出来あがり。

「うわーっ。おいしそう。ありがとう。」

ぼくは、すごくうれしくなりました。その時に食べたポテトサラダはとてもおいしかったです。

お母さんは、ますいが切れてきたらとてもいたそうでした。何回も何回もいたみ止めの薬をのんでいました。四日ほどはとてもいたそうでかわいそうでした。

その日から、ぼくと昇子ちゃんは、手のゆびのいたいお母さんにかわって、コックさんになりました。

オムライスやトンカツ、やさいいためや、おみそしる。ぼくはいろいろなものを作りました。ヘタだったけれど、みんながとてもおいしいとほめてくれたので、ぼくはうれしくて、うれしくて、毎日手伝いました。

そして、ぼくにはもう一つのお手伝いがありました。それはお母さんといっしょにおふろに入って、かみの毛をあらってあげることと、せなかとかをあらってあげることです。お母さんは右手の中ゆびをけがしたので、シャンプーができないし、せなかにも右うでにも手がとどきませんでした。だから、ぼくがお母さんの手になってあげました。

「ありがとうね。あきひと。」

ぼくは、その言葉がうれしくていっぱい手つだいました。こんなにお手つだいしたのははじめてでした。

二週間ほどたったら、お母さんは、糸もぬいてもらって、また前のように何でも作ってくれました。

みんなは、ぼくの作ったおかずをとてもほめてくれたし、すごくうれしかったです。だけどぼくは、やっぱりお母さんが作ってくれるごはんが一番おいしいと思います。そして、いつも元気でやさしいお母さんがすきです。これからも、できるだけお母さんの手つだいをしようと思っています。

だから、お母さんも、いつも元気でがんばってね。

金賞

夏休みに考えたこと

六年　辻本昇子

今年も全国でびっくりするような出来事が起きています。

「昇子。ちょっとーまたやわあ。」

今日もお母さんが新聞を読みながら、ニュースを見ながら言いました。

「最近の世の中って、ちょっとへんやなあ。人間どうしの殺し合いみたいな……それも親子や親せき……身近な間がらでの命のうばい合いが多いなあ。ほんまにこわいことやわ。」

何で、こんなことになってしまうんだろうと思います。特に、親が子供を殺したり、子供が親を殺したり。考えられないようなことが毎日のように日本のどこかで起っています。こんなニュースを聞くたびに、そういう悲しい出来事がなくなればいいのになあといつも思います。

私は今、十二才です。姉と弟がいて、特に弟とは毎日のようにけんかになります。友達の家は新しくてうらやましいなあと思うこともあります。私より姉は……とか弟は……とか思っておこる時もあります。

小学校生活最後の夏休み、

私は自分のことを考えてみることにしました。

昔の家なので、古いし小さくてせまいけれど自分の部屋とよべる部屋があること。家族みんなが元気でいられること。学校は人数は少ないけど、みんな仲が良くて、いい友達がたくさんいること。運動や勉強ができること。健康で毎日を過ごせること。毎日、おなかいっぱい食べられること。じゅくすいできること。

全てにおいて私は恵まれているんだなあと改めて思います。

けんかをしたり、不満を言ったり、泣いたり、おこったり……もしかしたら、全部がぜいたくなことなのかと思えてきました。

死にたくなくても病気に勝てずに亡くなってしまう人もいれば、親に殺されてしまったり、子供が親を殺してしまったり、お金めあてで殺したり殺されたり。そのような出来事の多い中で、私がこうしてここに元気に、そして不自由な所もなく生きていられることに感謝しなければと思います。

今年の二十四時間テレビのテーマは「家族で笑ってますか。」でした。

自分一人じゃなくて、みんなで笑っていられること・みんなが幸せじゃなかったらだめなんだという問いかけのようなテーマに、とても感動しました。いろいろな家族がテレビに出演していました。子供がたくさんの家族、子供が病気の家族、苦労して今の生活を手に入れた家族、目標に向かって努力している家族など、どの家族にも感動をもらいました。

このテーマのようにみんなで笑っていられる。そんな家族でいたい。クラス、学校でいい。そしたら、日本からいやなニュース・悲しい出来事が少しずつ減っていくのではないかな、と思います。

来年の四月、私は中学生になります。元気な体を決してむだにせず、小学校で教えてもらったことや、家族の中で学んだこと、全てを忘れることなく立派な中学生になりたいと思います。

二十四時間テレビの、西村知美さんのチャリティーマラソンには心から応えんを送りました。すごいがんばりでした。「やってできないことはない」ということを教えてもらいました。

私もあきらめずに努力してがんばります。

銅賞

はがばあちゃん

二年　ふじた　けいすけ

はがばあちゃんが六月二十三日になくなりました。はがばあちゃんという人は、ぼくのおとうさんのおかあさんのことで、おばまのはがというところにすんでいたので、ぼくたちは、はがばあちゃんとよんでいました。

はがばあちゃんは、ぼくたちにすごくやさしかったです。あそびに行くといつもアイスをくれたりザリガニつりをしてくれました。かなみが生れるまえに一どおんせんりょこうにも行きました。

はがばあちゃんは、ずっとまえにびょういんに、にゅういんしていました。げんきになったのでいえにかえりました。けどまたびょう気になってにゅういんしてしまいました。

ぼくは、かわいそうだな、はやく元気になってほしいなとおもいました。日曜日とかに、ぼくたちがびょういんに行くと、はがばあちゃんはとてもうれしそうでした。ジュースとかおかしとかをくれました。はがばあちゃんが元気になったら、またおんせんに行こうとびょういんでやくそくしました。

ぼくは、またおんせんにいけるとおもってうれしかったです。そしてはがばあちゃんのいるおばまびょういんにいっておかしをもらいながらあそんでいました。はがばあちゃんはぼくのやくそくをまもらずに、とうとう元気にならずになくなりました。ぼくはそのときゆう大さんのところにいっていました。まなやがチャリをぶっとばしてしらせにきてくれました。ぼくは、うそー。と、しばらくしんじられませんでした。

ぼくは、学校を休んではがばあちゃんのそうしきに行きました。そこには、くろいふくをきた人がたくさんいました。ぼくはせいふくでした。はがばあちゃんは、木のはこにはいっていました。その中になきながらはなをいれていました。ぼくは白いはなをいれました。はがばあちゃんはよろこんでくれたかな。木のはこにふたをして、くぎでうちつけました。ぼくもコンコンとうちました。金のかなづちでりゅうのえがかいてありました。とてもおもたかったです。そして木のはこを、れいきゅうしゃにのせて、かそうばへ行きました。ぼくはまえにもそこへ行ったことがあります。二年まえにひいばあちゃんがなくなったときに行きました。三つもやすばしょがあってひいばあちゃんはまん中だったし、はがばあちゃんもまん中でした。

まいしゅう金曜日ははがばあちゃんのいえに行っておまいりをしました。はがばあちゃんはほとけさまのでしになって一だん一だんかいだんをのぼっていくんだとききました。

八月十日に四十九にちのおまいりをしました。その日は、えんまさまにごくらくにいくかじごくにおちるかきめてもらえるそうです。はがばあちゃんはどっちになったかな?! すごくきになるからおしえて

ほしいです。ぼくはごくらくに行ってほしいとおもいます。はがばあちゃんはびょう気でくるしんでなくなったので、そのぶんてんごくでしあわせにくらしてほしいです。

銅賞

わたしのばあちゃん

四年　森岡優季子

私のばあちゃんのお母さんは、吉田に住んでいます。私は、ばあちゃんのことを知るために、話を聞きに行きました。

ひいばあちゃんはもう九十才をこえていますが、毎日ゲートボールに行くくらい元気です。ひいばあちゃんは

「もうわすれたでよ。」

と言いながら、教えてくれました。

私のばあちゃんは、昭和十年一月七日に生まれました。とても健康な子どもで、病院には行っていなかったそうです。それから、たいへん負けずぎらいだったそうです。

瓜生小中学校に通い、卒業すると、田んぼの作業を手伝い、冬の田んぼの仕事が無いときは、おさいほうやお花のけいこを習いに、小浜に行っていたそうです。

二十一才で結こんしました。そのころは田んぼの仕事も機械はなく、全部手でやっていました。そんな中で、私のお母さんとおばさんを産みました。それからコンバインやこう運機がはやってきて買ったので少し楽になり、会社に出て、はたらきはじめたそうです。その会社は、とてもきびしく、子どものちょっとした病気ぐらいでは休めず、おじいちゃんおばあちゃんにまかせて働いていたそうです。

私もお父さんとお母さんの仕事の関係でまいづるに住んでいましたが、お父さんとお母さんも、仕事があるので、熱が出たときは、よくばあちゃんに来てもらいました。保育園の運動会にも来てもらい、終わると、真っ先に、ばあちゃんの所にとんでいきました。

そのころからばあちゃんが大好きでした。

三才で堤に来て、野木保育所に通いはじめました。八時に起き、ばあちゃんが、たまごかけごはんを作ってくれて、自転車で送ってくれました。保育園に行く前は必ず本を三さつ読んでもらいました。時間がないときは一さつ持っていって、自転車の後で自分で読みました。

帰りは、タクシーで、堤まで帰り、またばあちゃんと一しょに歩いて帰りました。小学校に入学してからは、運動会やその他の行事には必ず参加してくれます。学校から帰ってくると、

「おかえりー。」

と、言ってくれます。出かけているときはいつもおき手がみがあります。それを見ると、

「ああ、そこにいるのか。」

とか、

「まだまだ帰ってこないな。」

とわかります。そうすると安心します。お母さんの帰りがおそいので、宿題を見てもらったり、聞いたりもします。それに、とてもおいしいごはんを作ってくれるので、ばあちゃんが、とても好きです。

もし、

「家族で一番だれが好き?。」

と聞かれたら、

「ばあちゃん。」

と答えます。

「ばあちゃんの、どこがすき?。」

と聞かれたら、

「全部。」

と答えます。

私は、ばあちゃんが、大好きです。

銅賞

お墓参り

五年　山形真由

「明日の朝、早起きやで。真由も行くか。」

と母が言いました。

「どこ行くん。」

と聞くと、

「おぼんやから、先祖さんらが帰ってきなるさけ、お墓におむかえに行くんや。」

と言ったので、私も十四日の朝に、お墓におむかえに行くことになりました。

そして、十四日の朝に、祖母に起こされ、お墓に行きました。私は、おけに水をくみました。母が、

「古い人からかけてよ。」

と言いました。右側の方から順に水をかけていきました。兄は、せんこうをしていました。母は、だんごなどをそなえていました。祖母も、せんこうをしていました。兄が、

「全部せんこうさせたで。」

と言うと、祖母が、

「まだやで。うちのお墓だけじゃなくて、ろくじろ、きゅうべい、ぎざえもん、ちょうざえもんにも立ててよ。」

と祖母が言うと、

「えっ、何て。」

と兄が聞き返しました。私も手伝いました。

「何でそんだけそなえるん。」

と言ったら、祖母が、

「ろくじろは、おばあちゃんの生まれた所やし、ちょうざえもんは、おじいちゃんのお母さんが生まれた所やしや。」

と言いました。私も、たくさんの人とずっとつながっているんだなと思いました。

「立てたらじぞうさんとかにもさしてよ。」

とまた祖母が言いました。

「真由、この人はな、おばあちゃんが生まれた時、お世話になったんやで。」

と祖母が言ったので、

「えー。」

とおどろきました。

「ごっつ昔の人かと思っとった。四十何年前の人やん。」

と私は言いました。

「おばあちゃんはな、お寺にきて、あんじゅさんに子守りしてもろとったんやで。」

私は、あんじゅさんという人の所に行って、せんこうを立てて、手を合わせて、お参りしました。

祖父のお墓を見ると、アマガエルがいました。

「うわっカエルや。」

と言いました。そのあと、お寺に行きました。おそなえものを見ると、またカエルがいました。

「うわっまたカエルがおる。」

と言うと、母が、

「このカエルは、きっとおじいちゃんやな。」

と言いました。

「お墓にもおったし、うちのおそなえ物にも今おったやろ。たぶん、おじいちゃんがカエルになって、帰ってきたんや。」

私は、そういえば、おそう式にも、あとにも、しばらくカエルがいたので、おじいちゃんが、私らを見守ってくれているんだなと思いました。

帰る時、空が明るくなってきました。

「さー、新聞くばりに行ってくるかな。」

と言って、新聞くばりをしました。風がとても気持ちよかったです。

将来の夢

野木小学校六年生

○私は、将来スチュワーデスになりたいです。そして、いろいろな国に行ってみたいです。　居関彩子

○ぼくの将来の夢は、かっこいい車に乗ることです。　井上純平

○ぼくの将来の夢は、プロ野球選手になることです。松井秀喜選手みたいにホームランをたくさん打ちたいです。　上野宏隆

○将来の夢はまだ決まってないけど、動物が好きなので動物関係の仕事がしたいです。　清水沙綾

○将来、かっこいい車で遠いところに行きたいです。　滝翔平

○ぼくの将来の夢は、バスケット選手になることです。マイケル・ジョーダンみたいに有名になって、アメリカでプレーしたいです。　田中克実

○今、一番なりたいのは服屋さんです。かわいい服をたくさん売りたいです。　辻本昇子

○私は、お菓子屋さんになりたいです。そして、みんながおいしいと言ってくれるものを作りたいです。　内藤七恵

○私は、保育士になりたいです。子どもが好きだからです。　宮川法子

○私は将来、美容師になりたいです。そして、いろんな人に気に入ってもらえるようなかみ型にカットしたいです。　山本有希

平成13年度 野木小学校同窓会会計決算書

〔収入の部〕

項目	13年予算	13年決算	増減	備考
繰越金	19,654	19,654	0	
会費	302,000	299,000	△3,000	1,000×299
広告掲載料	0	0		
雑収入	1,000	474	△526	会誌1冊分　貯金利息74円
繰入金	0	0	0	
合計	322,654	319,128	△3,526	

〔支出の部〕

項目	13年予算	13年決算	残額	備考
会議費	20,000	1,102	18,898	会報編集委員会缶茶
事務費	10,000	5,917	4,083	コピー代、プリンターインク、コピー紙
通信費	95,000	100,340	△5,340	会報郵送料、会報寄稿依頼状郵送料 等
会報費	100,000	97,775	2,225	会報印刷代、寄稿謝礼図書カード
記念品費	7,000	7,000	0	卒業生記念品
総会費	20,000	12,070	7,930	理事総会茶菓子、缶茶
特別会計費	60,000	60,000	0	特別会計へ繰り入れ
予備費	10,654	0	10,654	
合計	322,654	284,204	38,450	

収入決算額　支出決算額
319,128円 － 284,204円 ＝ 34,924円　残金34,924円は平成14年度へ繰り越します。

監査の結果、正確に執行されたことを認めます。

平成14年3月28日　監事　森克彦　倉谷清一

編集後記

野木小学校同窓会報第十五号をお届けします。お忙しい中、原稿執筆の依頼を快くお引き受けいただいた皆様、玉稿をありがとうございました。おかげで充実した紙面ができあがりました。

本年度、事務局の異動がありました。不慣れのため、事務執行が遅れがちとなりました。この場をお借りして、不手際を心からおわびします。すみませんでした。

さて、二〇〇二年十月、地村さん夫妻が帰国されました。市民体育館での歓迎会の席で、富貴恵さんはこう語っておられます。

「たくあんが食べたいです」

十月三十日、私は阿納の彦荘（富貴恵さんの実家）でそのたくあんを食べました。滋味あふれるたくあんでした。二十四年の歳月を越えるふるさとの味でした。

日本経済新聞の40ページ、最終面に「私の履歴書」が掲載されています。最近では、瀬戸内晴美氏、二上達也氏などが登場し、毎朝の私の楽しみとなっています。

二〇〇二年五月の執筆者は船村徹氏でした。毎日わくわくして読んでいましたが、九月、「歌は心でうたうもの」（日本経済新聞社）という題の単行本となりました。

その中で、夭折した親友の作詞家、高野公男氏はこう語るのです。

「きっと地方の時代が来る」

昭和二十四、五年、わずか二十歳の青年の言葉なのです。

・どこか東京の　片隅に
　夢があろうと
　きはきてみたが
（「東京は船着場」）
（前掲書　82ページ）

汐留、品川、六本木。東京では、二〇〇二年から二〇〇三年にかけて、いずれもこれまでにない規模で、再開発プロジェクトが完成を迎えます。キーワードは、「都市回帰」と「都市改造」。

地方の時代と東京集中。これからのふるさとはどうなっていくのでしょうか。